

## 共生について：あるいは、なぜ、宗教学を志したか

谷口智子

### 辺境・境界としての天草

私のアイデンティティは天草にある。そう、島原・天草の乱（1637年）や、天草四郎や、「からゆきさん」と呼ばれる東南アジアへ渡っていった哀しい女郎たちで有名なあの天草である。

豊臣秀吉によって中央集権化される前、つまり、小西行長や加藤清正が支配する前は、天草五人衆と呼ばれる土豪たちが闊歩していた僻地の、独立した島であった。陶石で有名な石灰質の土壌は米作に不向きで石高が少なく、民衆は貧困で唐芋（さつまいも）を食べてしのいでいた。乱が起こる前も起こった後も、人々は貧しかった。そのため、一揆の原因はマル経（※マルクス経済学）的に説明される場合が一般的であった。しかし、そこには宗教的な説明が一切なかったのに不満を感じる者が一名いた。それが私である。

僻地の天草はキリシタンの歴史や文化の根強い九州最西端の島である。「南蛮人」が渡来した時代、西欧最先端の文明を求めて九州の諸大名たちは一気にキリシタン化した。天草五人衆もそうであった。天草にはコレジオが創られ、日本で初めて「イソップ物語」や「平家物語」などの東西の古典が印刷され、ギリシャ語、ラテン語の授業や医学の授業、西洋音楽事始など、当時最先端の教育も行われた。南蛮人が渡来した

九州の島（々）は、海を媒介にして常に最先端の教育や技術を求めてきた。人々は貧しかったかもしれないが、常に好奇心旺盛な気風を持っていた。

僻地の島は、いわば、国と国の境界領域にある。海を隔てた他者の文明（それが古代中国や朝鮮であれ、近代初期のヨーロッパであれ）と日本との境界領域に生まれた私は、常に差異と共生ということ意識していた。他者や他者の文明との差異、そして好奇心や憧憬、共生の思想。異文化に興味を持ち、異文化を理解したい、という私の学問的動機は、辺境であり境界である「天草」という土壌から生まれた。

### 共生への憧れ

宗教学を志したのも、天草が持つ複雑な宗教史に由来すると思う。私の家の宗派は浄土真宗と曹洞宗が入り交じっているが、私自身の気分はまるでキリシタンである。乱後、人口が激減した天草には、徳川幕府きっての宗教政策家、鈴木正三和尚の肝煎りで、仏教諸派の寺院が雨後の竹の子のように建てられ、仏教徒が進んで入植した。私が通った保育園の母胎は、江戸初期に建てられた明德寺という名刹で、山門には「破切支丹」と掲げられており、よく見れば石段には踏み絵の十字架が彫られていた。キリシタンの乱で有名な島は、同時に、日本

でも有数の、宗教弾圧で有名な島となった。キリシタンはそのため、明治に至るまで隠れていなければならなかった。

私自身、異なる宗教や異なる文化的背景を持つ者同士の、共生への憧れが強烈にある。なぜなら、文化的差異や宗教的差異から来る差別や迫害を、常に強烈に意識せざるをえない文化的土壌に生まれたからである。辺境の地天草ではあまりよく知られていない、東京の国際基督教大学に入学したのも純粋に好奇心からである。戦後マッカーサーが創設に尽力したその大学では、少人数精鋭の質の高いリベラル・アーツは学べたが、一方、アメリカ帝国主義・キリスト教国家中心主義の出先機関のような部分もあった。そこでは宗教学は学べず、キリスト教だけ学べた。牧師である教授の立場は白人文化中心的な価値観のいわゆる WASP で、異文化理解や宗教間対話は、??? であった。

### 宗教的平和、多文化共生は可能か

宗教的平和や異文化理解、他者理解は、人類が到達すべき理念であり、目標である。しかしそれは、歴史的現実において、十分に果たし得ることのできない、あるいはできなかった、あるいは到達し難かった目標である。宗教的平和や多文化共生の理念は、常にその背後に、そうなしえなかった（あるいはなしえない）差異や暴力が見え隠れするという現実を私（たち）に突きつける。

これまでの私の研究は、ラテンアメリカにおける暴力的なキリスト教の改宗と土着宗教との闘ぎ合いという、宗教史のかなり

ダークな部分を扱っている（それは「魔術」や異端審問の研究にも結びつく）。それは植民地主義やミッションに凝縮される、政治や宗教の一方的な押しつけや、西欧文明による「未開で野蛮な文明」に対する優越性と迫害、無理解に対する抗議の意味もある。しかしそれだけではない。私がこれまで宗教史の暗黒面を研究してきた理由は、差異や迫害を超えた理解や共生が可能か、ということに常に意識し、闇の部分に人類は乗り越えることができるかということに常に考えていたからである。

十字軍やレコンキスタの歴史に学ぶことなく、アメリカ合衆国のブッシュ大統領は、9.11をきっかけとして、「キリスト教国家」対「イスラム教国家」という新たな宗教戦争を勃発させた。煽られた民衆は兵士として志願し、「聖戦」に出かけていって傷つき、疲弊し、この戦争は果たして正しかったのかと苦悩する。一方、イラクでは女子供までが人間爆弾として無差別テロの道具として自ら志願していく。この怨嗟の連鎖を生み出したのは、9.11ショックを受けたさまざまな移民集団からなる多民族国家アメリカの、ナショナリズム的反動であり、他者の宗教や異文化に対する拒絶や自文化中心主義ゆえんである。

文明や技術は発展しても、人間性はなかなか発展したり、成熟したりしない、というのが、目下のところ、「共生」に憧れるペシミスティックな宗教学者（である私）の感想である。

## 著者プロフィール

谷口智子 (TANIGUCHI Tomoko) 外国語学部 (スペイン学科) 准教授 宗教学、ラテンアメリカ地域研究

■略歴：熊本県天草市生まれ。国際基督教大学人文科学学科卒業。卒論のテーマはヘルマン・ヘッセの『デミアン』。好きな作家はドストエフスキーとヘッセ。好きな漫画家は萩尾望都と山岸凉子。好きな作曲家は J. S. バッハ。バブル全盛期、弘文堂という学術出版社に入社するも、じき退社し、大学院に出戻る。筑波大学大学院博士課程哲学・思想研究科で宗教学を学び、人類の宗教史の研究を行う。地域研究としてはラテンアメリカ研究である。1997年～1998年に約1年間、リマ(カトリック大学、リマ大司教区古文書館など)とサンチャゴ(チリ大学、チリ国立古文書館)に遊学・留学し、学位論文を書く。2000年博士(文学)取得。「ヌミノーズ(恐れと懐れ)」という言葉や、「反対の一致」という学術用語が好き。宗教学者エリアーデの孫弟子にあたる。ペルーでの師匠は歴史人類学者のルイス・ミリオネスである。



■これまでの研究：修士論文、博士論文とも、植民地時代ペルーにおけるカトリック・ミッションとアンデス先住民宗教の接触、対立、混交化などについて書いた『新世界の悪魔』というテーマである。修士論文は現代世界での影響(人類学・民族学の史料の読みやフィールド調査を含む)、博士論文は主に古文書を読み、分析した歴史的研究である。2000年に筑波大学で学位取得(博士・文学)。近著は以下。

- ・『『偶像崇拜』－植民地期アンデスの民衆宗教－ 荒木美智雄編著『世界の民衆宗教』、83-100頁、ミネルヴァ書房、2004
- ・「南米の先住民宗教」/「オセアニアの先住民宗教」/J. フレイザー「金枝篇」/A. ファン・ヘネップ「通過儀礼」/J. スミス「宗教の意味と目的」、棚次正和・山中弘編、『宗教学入門』、65-71、222-223、237-239頁、ミネルヴァ書房、2005
- ・「首狩りとインカリー植物神の殺害と生長に関する神話・儀礼」『愛知県立大学外国語学部紀要』(地域研究・国際学編)第37号、123-140頁、2005
- ・「先住民の改宗事業－土着宗教と融合した独特のカトリック文化－」/「チキトスのイエズス会ミッション」真鍋周三編、『ボリビアを知るための68章』、236-241頁、明石書店、2006
- ・『新世界の悪魔－カトリック・ミッションとアンデス先住民宗教－』大学教育出版、2007年

■これからの研究：アメリカ大陸の先住民宗教全般を比較宗教学の立場から研究したい。さらに、大航海時代のキリスト教と世界各地の土着宗教との接触の問題を扱いたい(コンタクトゾーンの宗教研究)。キリシタン研究も後者に含まれる。

■共生について：到達すべき人類の目標であるが、現実的に実現が難しい問題。人類はもっと歴史に学ばなければならない。